

平成 18 年(2006 年)1 月 31 日

長野県病害虫防除所

病害虫発生予察特殊報 第 2 号

病害虫名：イチゴピシウム根腐病

発生作物：いちご

病原菌名：*Pythium helicoides* Drechsler

1 発生経過

平成 17 年 9 月、北信地区イチゴ養液栽培のほ場で、下葉が黄化、萎凋し枯死する被害が発生した。被害株の根部は暗褐色に変色し、クラウン部にも病徴が認められた。

野菜花き試験場において菌の分離を行ったところ、ピシウム属菌が多数分離されるとともに健全株への接種試験により病徴が再現された。併せて同試験場から岐阜大学流域圏科学研究センター植生資源研究部に、分離されたピシウム属菌の同定を依頼したところ、*Pythium helicoides* であることが確認された。

本病は、平成 17 年 3 月に行われた日本植物病理学会において、岐阜県および静岡県の一チゴ苗生産ほ場での発生が確認されたとの報告があり、病名をイチゴピシウム根腐病として提案されている新病害である。

2 病徴

育苗後期や本ぽで発病した場合、葉縁の枯れ上がり、根部の暗褐色変や腐敗が本病の特徴である。また、発病初期では、日中に下葉が萎れるものの日没後に回復するなどを繰り返す、徐々に生気を失い枯死に至る場合が多い。炭疽病や萎黄病に比べるとやや病勢の進展が緩慢な傾向である。

3 発生生態

ピシウム属菌は一般に、遊走子嚢から遊走子を水中に大量に放出し、水媒伝染するため、養液栽培における最重要病害である。本菌 *P. helicoides* は、国内では平成 9 年にバラの養液栽培で始めて発生が確認されている。

また、本菌の生育適温は 30～35℃で、遊走子は 25～30℃で発生が著しくなる比較的高温性の病害である。県内では培地内の温度が高くなる 7 月から 9 月の高温期に発生しやすいと考えられる。

なお、本菌はミニバラ、カランコエ、ポットマム、ガーベラ、ポインセチア、ダイズなどに強い病原性があると報告されている。

4 防除対策

- (1) 親株には必ず無病苗(病原菌が感染していないもの)を用いる。
- (2) 本病原菌は、育苗期に親株から雨滴等、水の飛散により感染する危険性があるので、育苗形態を工夫する。
- (3) 培地等の農業資材は必ず消毒するとともに、養液タンク内等に病原菌が混入しないように、ほ場周辺を清潔に保つ。特に、循環式栽培の場合には、蔓延しやすいので注意する。

(4) 根痛みが起きると感染を助長するので、適正な栽培管理に努める。



葉の黄化と葉縁の枯れ上がり



根部の変色